

## 異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（12）

—— 異文化コミュニケーション教育における「幸福」（3） ——

青 木 順 子

Happiness in Intercultural Communication Education (3)

Junko AOKI

幸福という考えを扱う時、個人の幸福感という主観的な感情の充足と、そこに存在する大多数の個人の多種多様な幸福が実現するような、社会全体として見た時の幸福感の存在、すなわち、幸福なる社会の実現、そして、その範囲をさらに広げ、「異なる人々」の属する社会における幸福の実現、という観点を、どのようにお互いに関わらせて扱うのかという問いが、「異文化コミュニケーション」の「教育」という性質から、必然的に出てくる。異文化間の幸福の実現は、異文化コミュニケーション教育が、「教育」として、教育を受ける者の自己実現の達成を手助けする限りにおいて、その目的の一つから外すことは出来ない。この問いとの関係で、これまでに、個人の幸福の実現について論じてきたが<sup>1)</sup>、前論考では<sup>2)</sup>、主に幸福なる社会と個人の幸福の選択との関わりについて考察し、以下のように結論した。社会で不条理に幸福を妨げられている人々の数が最小であるように努力する個人の行為が最大限なされる社会が、目指すべき「幸福なる社会」である。そこでは、「善き人の善き行為」が社会の営みの中で妨げられることなく自然に為され、大きな成果をあげていき、善き人が悲劇的な最期を迎えることなく、善き人を助ける人がその代償として喪失するものもないだろう。そうした社会の実現には、個々人が、自らの生を「よく・生きる」過程で、不条理な理由で幸福になることを妨げられた人々の数を絶えず減らしていくことを目指すことが必要とされており、当然、その過程で、「よく・生きる」ことで「幸福」を得ることができるだろうと。

しかし、実際には、異なる人々の国家や異なる民族の住む地域からなる世界では、「幸福なる社会のための選択」ということに限っても互いに対立してしまうような選択肢も多々あり、現実の選択においては、人は往々にして自分とは異なる者達の幸福の実現を犠牲にしているという事実が存在する。幸福を選択する側にとっては、そうした異なる者達は、身近な、自然に共感を重

1) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（10）－異文化コミュニケーション教育における『幸福』（1）－」安田女子大学紀要 No.36, pp.57-69, 2008.

2) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（11）－異文化コミュニケーション教育における『幸福』（2）－」安田女子大学紀要 No.36, pp.57-69, 2009.

ねやすい対象でもなく、まして愛する対象でもないのであるから、選択はその個人にさほど苦痛や葛藤をもたらすものでもなく、難しくもないのである。そうした状況において、異なる人々の幸福なる社会の関わりをどのように考えていくべきなのかについて、本論考で、引き続き考察をすすめていきたい。

### 1. 「幸福なる社会へ去る」という選択

2006年、トルコ出身では初めてのノーベル賞作家となったオルハン・パムクの『雪』<sup>3)</sup>は、2001年9月11日の同時多発テロ前に完成し、直後の2002年初頭に刊行され、英訳本は、米国、英国、オランダでベストセラーとなった。物語の大筋は以下のようなものである。主人公の詩人Kaは、母親の葬式に出るために、12年間に及ぶ亡命地ドイツからイスタンブールに戻ってくる。かつての学生運動の仲間、今は離婚をして独り身の旧知のイベッキとの再会に、自分のこれからの幸福の望みをかけて、彼はさらに、トルコの国境の町カルスに向かう。西洋化、近代化、イスラム原理主義、政教分離主義、人々の異なる立場が激しく衝突しあう社会で幸福など手に入れることはできないと、吹雪のカルスでの3日間、政治的なことから遠ざかり、自分のこれからの幸福だけをただ求め、最初から、故郷を去りイベッキとドイツへ戻ることを望んでいる。そんなKaと、イスラム原理主義者の指導者で、危険なテロリストとされて地下に潜っているBlueとの会話である。

“And how do you define happiness?” “Happiness is finding another world to live in, a world where you forget all this poverty and tyranny. Happiness is holding someone in your arms and knowing you hold the whole world.” He was going to say more, but Blue jumped to his feet. (p.353) (「そして、君は幸福をどう定義するのかね。」「幸福とは、住むことのできる別の世界を見つけることだ。この全ての貧しさと圧制を忘れることのできる世界をね。幸福とは、自分の両腕に誰かを抱き、自分が全世界を抱いているとわかることだね。」彼はもっと続けるつもりだった。しかし、ブルーは急に立ち上がった。)

Kaも、幸福になることイコールドイツに住むことではないことは、すでにわかっている。実際には、ドイツでの12年間に、Ka自身は一度も幸福ではなかったのだから。

Could he find lasting happiness with Ipek? It wasn't happiness he was after—this was very clear to him following his third glass of raki; he would even go so far as to say that he preferred to be unhappy. The important thing was to share the hopelessness, to create a little nest in which two people could live together, keeping the rest of the world at bay. (p.328) (イベッキと一緒に永続する幸福を見つけれられるのだろうか。彼が求めているのは幸福なるものでさえなかった。これは、3杯目のラキを飲みながら、彼には明白なこととなった。つまり、不幸であることを望むとさえ言ってもいいのだ。大事なことは、あの絶望を分け合うこと、世界を寄せ付けないうで、2人が一緒に生き得る、ささやかな住処を築くことなのだ。)

3) Pamuk, Orphan, *Snow* (translated by Maureen Freely), Vintage International, 2005. 原作はトルコ語である。本稿では、作品名を指す時は、邦題『雪』(和久井路子訳)を使用した。ただ、引用自体は英語訳からとしている。9.11直後の出版で反響を読んだ本であり、世界で人々に理解された版で解説を試みたいという点からの選択である。英訳版から原文を抜き出している場合は、(注)をつける代わりに、原文の箇所後に頁を記す。原文の後に付けてある邦訳は、筆者自身による。

12年間、Kaが移民として生きたドイツの生活は、絶望、希望の欠如、“hopelessness”であった。しかし、イバッキを得、それを一緒に分かちあうことで、今度は幸福になれると考える。その「ドイツにおけるドイツ人のトルコ人に向けられる視線」を、BlueがKaに語ってみせる。Kaが、12年もの長きに渡ってドイツで感じるしかなかった絶望の理由でもある。

Wherever I happened to be walking, there was always one German who stood out of the crowd as an object of fascination for me. The important thing was not what I thought of him but what I thought he might be thinking about me; I'd try to see myself through his eyes and imagine what he might be thinking about my appearance, my clothes, the way I moved, my history, where I had just been and where I was going, who I was. It made me feel terrible but it became a habit; I became used to feeling degraded, and I came to understand how my bothers felt. Most of the time it's not the Europeans who belittle us. What happens when we look at them is that we belittle ourselves. When we undertake the pilgrimage, it's not just to escape the tyranny at home but also to reach to the depths of our souls. The day arrives when the guilty must return to save those who could not find the courage to leave. (pp.79~80) (どこでもいい、歩いている、その時、俺を好奇の対象で見つめるドイツ人が群衆の中に必ず一人はいるんだ。大事なことは、俺が彼をどう思うかではなくて、彼が俺について思っていると、自分が考えることなんだ。彼の視線を通して自分自身を見て、彼が、自分の見かけや、服や、歩き方や、生い立ちや、今までいたところや、向かうつもりのところ、そして、自分が誰であるかについて想像する事なんだ。嫌な気持ちにさせたけど、習慣ようになったね。自分が貶められたように感じて、自分の兄弟たちがどんな風を感じたかもわかったね。ほとんどの場合、我々を貶めるのはヨーロッパ人ではなくて、我々が彼らを見る時、自身を貶めているのだよ。故郷を出て流浪をするって、単に故郷での圧制を逃れることじゃなくて、我々自身の魂の奥底に辿り着くことだ。そして、後ろめたい思いを抱えた者達が、立ち去る勇気を持てなかった者達を救うため、故郷に戻る日が来るんだ。)

Kaは、「幸福なる社会」として選んだ西洋の、ここではドイツの、善意の視線を向ける者の例として、Kaを一度だけ自分の家に呼んだハンス・ハンセンなる者について語る。二度と招かれることがないまま、その理由を考えた。同情さえも、幸福でない彼には慰めだったと。それに対するBlueの反応は、鋭くはあっても、Kaの心情に対する「理解」ではある。

“Even if they did put pressure on you and tell you how they pitied you, it is human nature to seek pity. There are thousands of Turkish-Kurdish intellectuals in Germany who've turned that pity into a livelihood.” (p.149) (「たとえ彼らが君にプレッシャーを与えなかったとしても、どんなに同情しているかを言わなかったとしても、同情を求めるのは人間の性質だよ。同情を生きる糧にしているトルコ・クルド人の知識人達が、ドイツには何千人もいるからね。」)

しかし、その一時的に移民には慰めになるかもしれない同情さえ、得られないことの方が多い。なぜなら人は、個人個人には同情できたとしても、民族という集団に対しては、同情ではなく、一種の優越感を向けるからだ、この小説のクルド人青年は語る。

“People might feel sorry for a man who's fallen on hard times, but when an entire nation is poor, the rest of the world assumes that all its people must be brainless, lazy, dirty, clumsy fools. Instead of pity, the people provoke laughter. It's all a joke: their culture, their customs, their practices. In time the rest of the world may, some of them, began to feel ashamed for having thought this way, and when they look around and see immigrants from that poor country mopping their floors and doing all the other lowest paying jobs, naturally they worry about what might happen if these workers one

day rose up against them. So, to keep things sweet, they start taking an interest in the immigrants' culture and sometimes even pretend they think of them as equals." (pp.298-299) (「人々は、困難な時期に困っている個人には同情するよ。でも国自体が貧しい時は、世界はその人々はみな馬鹿で、怠け者で、汚くって、どうしようもない輩だと考えるんだ。同情の代わりに、笑うわけだ。まさにジョークだ。彼らの文化、慣習、習慣がね。こんな風に考えることを恥ずかしく思う時もあるけれど、見渡して、その貧しい国からの移民達が床を拭き、低賃金の仕事をしているのを見て、こんな者たちが自分達に反抗したらどうなるんだなんて心配してしまう。そして、そうならないようにと、移民達の文化に興味を持ち始めてみたり、時には、彼らを同等に考えているふりをしたりさえするんだ。)」

皮肉なことに、Kaが「幸福になれる」として今考える唯一の選択は、まさにそうした移民として、自国を離れ、人々が、同情を向けるだけでなく、彼らを見下す社会でもあるドイツに向かうことでしかなかった。他の多くの移民達がそうであったようにである。

## 2. 「幸福なる社会で生きる」という選択

ラヒリの短編 *When Mr. Pirzada Came to Dine*<sup>4)</sup> には、作者と同じインド系アメリカ人の10歳の少女が出てくる。妻と娘を残して、国費で米国に留学している大学講師のピルサダさんは、院生用のアパートに住んで炊事設備も十分でなく、テレビもないため、少女の両親は彼を毎夜夕食に招いている。両親と同じ言葉話し、同じ食習慣を持ち、同じようなジョークに笑う、そのピルサダさんが、インド人ではなく、「ベンガル人で、イスラム教で、東パキスタンに住む」ことを、両親から聞いても、最初は、はっきりイメージすることができないほど、その場所の地理にも情勢にも疎いのは、典型的な米国人の子どもと一緒にである。そんなある日、「東パキスタンの独立戦争」が起こる。テレビのニュースでの東パキスタンの悲惨な映像を居間で一緒に見、ピルサダさんが残してきた家族を心配しているのを見る中で、彼女は、自分の家の居間ではみんなが関心を持っているこの戦争も、学校では誰も話題にしさえしないことに今さらながら気づく。ハロウィーンでお菓子を集めて帰った夜は、期待した家族の出迎えもなく、居間では、そのパキスタンの状況が緊迫しているというニュースをピルサダさんと両親が並んでじっとみているのを発見する。ピルサダさんの様子は少女の目から見てもいつもよりずっと悲しそうで見える。しかし、少女が気づくのはそれだけではない。この戦争の間、両親でさえ、いつもの暮らしをしていないことである。「ニュースを見なさい。」と言わなくなった父、ご馳走を並べなくなった母、インドに住む親類に電話をして、ピルサダさんの国、東パキスタンの状況を聞こうと、真夜中に声を張り上げている両親、という事実である。

Most of all I remember the three of them operating during that time as if they were a single person, sharing a single meal, a single body, a single silence, and a single fear. (p.41) (そして何よりも、その時期、3人は、食事も、身体も、沈黙も、恐怖も一緒に、まるで一人の人間のように動いていたのを感じている。)

4) Lahiri, Jhumpa. *When Mr. Pirzada Came to Dine, in Interpreter of Maladies*. Houghton Mifflin, 1996, pp.23-42.小説から原文を抜き出している場合は、(注)をつける代わりに、原文の箇所後に頁を記す。原文の後につけてある邦訳は、筆者自身による。

米国に生まれ育ち、ハロウィーンに興じ、米国文化をそのままに受け入れているように見え、同時に、図書館でパキスタンの本を一人でこっそり調べてみる、この少女も、米国での仕事に慣れて故国に帰る気もないけれど、名前を頼りに電話帳で故郷からの人々を探しては、もてなそうとする彼女の両親も、故郷の心配事の最中でも、いつも背広姿できちんと応対し、帰国後、“Thank you” という英語では、感謝の気持ちは伝えきれないと書いてきたピルサダさんも、「オリエントなるもの」を見たがる西洋の視点からでは計り知れない、語りえない努力で、「幸福なる社会」として選んだ場で、移民として、幸福になるために、文化の重層性を必死で生き抜いているという事実がそこにはある。

その努力がいかに大きく英雄的とさえ言えるのかについては、ラヒリはまた別の短編 *The Third and Final Continent*<sup>5)</sup> で、主人公の一人にこう語らせる。

While the astronauts, heroes forever, spend mere hours on the moon, I have remained in this new world for nearly thirty years. I know that my achievement is quite ordinary. I am not the only man to seek his fortune far from home, and certainly I am not the first. Still, there are times I am bewildered by each mile I have traveled, each meal I have eaten, each person I have known, each room in which I have slept. As ordinary as it all appears, there are times when it is beyond my imagination. (pp.197-198) (宇宙飛行士は、永遠のヒーローだが、月にいたのは数時間だけだ。私は30年近くこの新世界に居る。確かに、私はたいしたことを成し遂げたわけではない。故郷から離れ自分の将来を求めたのも私だけではないし、私とその最初の人間というわけでもない。それでも、自分が旅した距離に、食べてきた食事に、知り合った人に、寝泊りしてきた部屋に、その一つ一つに自分でも驚くような気持ちになることがある。普通には見えるけれど、自分の想像を超えることだと思ふ時があるのだ。)

そもそも異なった文化に生きるということは、大いなる挑戦なのである。しかもこの場合、その挑戦は、「オリエントなるもの」を見続けることを止めようとしないう西洋でなされたのだ。その上で、良く生きるということは、ラヒリがこの短編でインドから米国に移住した男に語らせているように、まさに月旅行を上回ることなのだろう。世界には、故郷を後にして移住し、異なる文化の中で生きる人が沢山存在する。「移民」という言葉で括られるその人々は、西洋、すなわち「幸福なる社会」の人々が往々にして劣っていると見なしている自文化に向ける視線に耐え、複数の文化が織り成して創る文化の重層性の存在を認めながら、その中で生きている。この小説は、文化の重層性に住まうことの出来る人間の柔軟さと強さを通して、人間の持つ可能性の素晴らしさを示しているのである。月旅行の宇宙船に乗る飛行士の勇気に私たちはいつも圧倒される。未知の危険、不安、出来事、というものに耐えることができる人々なのだ。しかし三つの大陸で30年以上生き続けることができた彼のような人々も、月に数時間いた宇宙飛行士と同じように、未知の出来事、危険、不安に打ち勝って生きてきた尊敬に値する人々なのである。そして彼等の旅は何十年も続くのである。

ラヒリと同じく、インド出身の女性作家デザイの小説 *The Inheritance of Loss*<sup>6)</sup> にも、米国で生きるためにインドを出て、そこに自分の居場所を見つけられず、自己存在の意味さえ疑い苦し

5) Lahiri, Jhumpa. *The Third and Final Continent, in Interpreter of Maladies*, Houghton Mifflin, 1996, pp.173-198. 本稿においては、邦題を使用する。また、小説から原文を抜き出している場合は、(注)をつける代わりに、原文の箇所後に頁を記す。原文の後に付けてある邦訳は、筆者自身による。

6) Desai Kiran, *The Inheritance of Loss*, Grover Press, 1999.

む若者ビジュが出てくる。故郷で住み込みの料理人をしている彼の父は、米国に居ることでビジュが「世界で一番幸せになる」ことを信じた。父には考えも及ばなかったことが、その「幸福なる社会」でビジュをおそう激しい自己憐憫の感情である。

Looking at a dead insect in the sack of basmati that had come all the way from Dehra Dun, he almost wept in sorrow and marvel at its journey, which was tenderness for his own journey. In India almost nobody would be able to afford this rice, and you had to travel around the world to be able to eat such things where they were cheap enough that you could gobble them down without being rich; and when you got home to the place where they grew, you couldn't afford them anymore. "Stay there as long as you can," the cook had said. "Stay there. Make more. Don't come back here." (p.209) (デーラ・ドーンから運ばれるバスマティ米の袋の中に虫が死んでいるのを見て、彼はほとんど悲しみに泣きそうになった。それでも、彼の旅よりはずっと楽であることに驚いた。インドでは、ほとんどの者がこの米を買うことができない。そして、おまえは、この米が安くて、金持ちでなくてもがつつ食べられるような場にいる。これを食べられるために、世界をはるばる来ないといけなかったんだ。そして、この米が育った場に戻ったら、もう買うことも出来ないというわけだ。「出来る限りそこに居るんだよ。」と父は彼に言った。「そこに居るんだ。もっと稼いでね。ここに戻って来るんじゃない。」)

"I am growing fat—ten times myself," and was shocked when he went to the ninety-nine-cent store and found he had to buy his shirts at the children's rack. The shopkeeper, a man from Lahore, sat on a high ladder in the center and watched to make sure nobody stole anything, and his eyes clutched onto Biju as soon as he entered, making Biju sting with a feeling of culpability. But he had done nothing. Everyone could tell that he had, though, for his guilty look was there for all to see. He missed Saeed. He wanted to look, once again, if briefly, at the country through the sanguine lens of his eyes. (p.256) (「僕は肥えてきている、10倍もだ。」そして、99セントの安売り店で、子ども用の棚から自分がシャツを買う時、ショックを受ける。ラホール出身の店員が、店の真ん中のはしごの上に乗れ、誰もくすねていかにないように見張っている。ビジュが入るなり彼ばかり見て、何かしでかしたような気持ちにさせて苦しめる。しかし、彼は何にもしてない。それは、みんなわかっている。だけど、彼の後ろめたそうな様子のために見るんだと。彼は、サイドがなつかしかった。もう一回だけ、わずかな間でもいい、サイドの眼の楽天的なレンズ越しに、自分もこの国を見られたらと思った。)

結局、西洋の「幸福なる社会」の一員となっても、その西洋社会から劣位と勝手に定義された歴史を持つ文化の人々にとって、「自分のよって立つ位置」を認識することは、決して容易ではなく、誠実に向き合う程激しい痛みを伴うような過程なのである。ビジュは故郷に戻り、父は彼をただただ抱きしめる。「幸福なる社会」で「幸福になる」という本来矛盾のなかったはずの期待に応えるために、彼が十分以上に闘ったことはわかったのである。2006年のワールドカップ時、日本チームと対戦したオーストラリアチームには、旧ユーゴスラビアの内戦時にオーストラリアへ移住したクロアチア人の選手が何人もいるのに気づかされた。また、同じワールドカップでの最終戦で、その8年前のワールドカップでは、優勝により多文化融合の成功例のように称えられたフランスチームの、最も有名な移民のプレーヤーでヒーローとして持ち上げられていたジダンが、イタリア選手の侮蔑の言葉に頭突きで応答し、現役最後の試合から退場させられるという事件も起きた。当初は人種的侮蔑の言葉ではなかったのかと噂され、後で、ジダンがイタリア選手に言われたとされた言葉も、文化的に下であると見下されてきた人々が特に敏感に反応してしまう、身内の女性を侮蔑する言葉の類であったことがわかった。より「幸福なる社会」、同時に、優れているとされている他文化の方に、より良く生きる、すなわち幸福になるために移り住むことは、こうした危うさの中に住むということでもある。その危うさの不安や動揺の中で、自分の日々の

営みを自分らしく選んで生きるということでもある。第二次世界大戦時に砂漠の収容所に送られた日系人、9.11後に、米国のみならず、比較的多元的な社会が確立していると思われたオランダにおいてさえ、ひどい嫌がらせにあったイスラム教徒住民、世界的不況に、どの国でも真っ先に解雇される外国人、歴史はその危うさの例には事欠かない。ワールドカップで誰もが当たり前のように応援できる日本という国に生きる自分の立場が、そうした人々とまた違うことに私たちが気づかなければ、私たちは、文化の重層性ということを日々感じながら移民として真摯に生きざるをえない、そうした多くの人々については忘れたままであり、ましてその思いに気づくこともないままに、この世界を理解し続けるのであろう。これもまた世界にとっては、とても危ういことなのである。

### 3. 「幸福なる社会からの拒絶」と「愚かさ」

「幸福なる社会」側の移民への対応は、それが絶望的な状況からの脱出に見える時でさえ、寛容というわけではない。2009年1月、オバマ大統領の就任式が世界の注目を集めている頃報道されていたニュースに、2008年12月にミャンマーを脱出したロヒンギャ族の扱いに関するものがあった。ロヒンギャ族は、イスラム教の少数民族で、推定人口約100万人、1979年に多数派の仏教徒との対立が先鋭化し、約30万人がバングラデシュに難民化し、91年以降には、軍事政権の弾圧により流出しているといわれている。このニュースによると、約1200人が、途中でタイ国軍に拘束され、暴行を受けた後、船のエンジンを外された状態で、わずかな米と水を持たされて、沖合に放置された。500人以上は死亡した、220人が乗ったある船の場合は、約3週間漂流し、飢えと乾きで22人が死亡し、生き残った者も一週間は海水を飲んで生き延び、インドネシアの漁船に発見されたという報道もあった。しかし、インドネシアは、「経済的理由」による出国であり、「難民認定はしない」と主張、後に追い返したこと自体は認めたタイ政府も、対応自体は「人道的」だったと主張をした<sup>7)</sup>。そもそも、このロヒンギャ族は、軍政のもとで、文字通り「生存することを許されないような状態にある<sup>8)</sup>」とされている。結婚も許されず、ほぼ奴隷状態で置かれ、ミャンマーに送り返された場合は、逮捕されるか、さらに最悪の状況も予期できる、まさに、「国を持たない、望まれない、世界で最も忘れられた人々<sup>9)</sup>」である。自分の故郷でありながら、そこを自分の国とは出来ない人々、そこに「幸福なる社会」を望むことが全く不可能である人々、なのである。「幸福なる社会」が移民を無制限に受容出来ないことは、彼らも理解はしよう。しかし、ここまで絶望のふちに置かれた彼等に、非人道的な扱いさえする「幸福なる社会」側の、正当な理由なるものは全く理解できないだろう。「これらの人々を文字通り追いやることは出来ない。まるで、彼等が人間以下であるかのよう<sup>10)</sup>」。それなのに、「人間以下であるかのよう」に扱われる「正当な」理由とは何なのか、理解など出来るはずがないのである。<sup>11)</sup>

ロヒンギャ族だけではない。キューバから米国へ、アフリカからEU国へ、ゴムボートで海か

7) 「ミャンマーのロヒンギャ族 受け入れ巡り綱引き」読売新聞、2009年2月10日。

8) “They are not allowed to survive” “Fight Risk” Time, January 20 pp.34-35, 2009.

9) “Stateless and unwanted, they are one of the world’s most forgotten people” (“Fight Risk” Time, January 20, pp.34-35, 2009)

10) “You can’t literally make these people go away, as if they were less human.” (“Fight Risk” Time, January 20, pp.34-35, 2009.

ら不法侵入を試みての遭難死、アジアからEU国へ、トラックの荷台のコンテナに隠れて国境を越える最中での窒息死と、「幸福なる社会」を求め、祖国を後にした人々が、その過程で人間以下の状況下で命を失っている。食べることも不可能な、先の見えない自分の故郷、「幸福にならない社会」を出たのだから、そうした生命の危険を冒しても仕方がないという「幸福なる社会」である受け入れ側の傲慢さと、彼らの貧しさは、そうした自らの死さえ招くような判断の愚かさでもあるのだといった論理が、ニュース報道にいつも垣間見える。前節で挙げた『雪』でも、豊かな富める側が、貧しい側を馬鹿であり価値がないことと同一視し、絶えず混同することについて、クルド人の青年が述べる箇所がある。

“Mankind’ s greatest error,” continued the young Kurd, “the biggest deception of the past thousand years is this: to confuse poverty with stupidity.” (p.298) (「人類の最大の過ちは」と、若いクルド人は続けた。「過去数千年間の最大の偽りは、貧しさを愚かさと一緒にすることだ。」)

一方、祖国を出ていかない者達は、命の危険を冒すような「愚かさ」を示さない程に賢明だからといって、豊かな側から賞賛され、幸福になる援助を得るわけでもない。パキスタンの難民キャンプから少年が英国を目指す旅を描いた映画、*In this world*<sup>12)</sup>で、コンテナでの窒息死がリアルに描かれる。誰にとっても、怖ろしい死に見える。しかし、愚かな死ではないはずだ。危険を侵すしかなかったのだから。丁度、映画のポスターが使った言葉のように、「人間は幸福を求める権利がある(“People have a right to pursue happiness”)」。たまたま彼等の故郷である社会が「幸福なる社会」を約束できないからといって、それで、人間が手に入れることをあきらめられるようなモノでは、幸福は決してないのである。

2009年2月のCNNニュースに、90年代の初め、国情不安定で米国に難民として居住を許されたりベリアの人々が、一時的滞在が認められなくなる日を3月末で迎えるため、米国に引き続き留まれるように運動している様子が流れた。法律では、母国が選挙により民主的国家となり、これ以上の滞在資格は認められない。しかし、長い月日の間に、子どもは米国で生まれ市民権を持ち、彼等もまた生計を立てる術を得ている。さらに、民主国家になったといっても、未整備のインフラ、高い失業率と、帰国後での生活に見通しがたつような甘い経済状況ではない。理解を示す米国人もいるが、それはわずかで、大多数の意見を、共和党議員の一人が代弁していた。「彼等は、民主国家の故郷に戻って、これから自分達の国家の再建に尽くすべきだ。それなのに、まだ留まるというのであれば、米国の歓待(好意)を利用していることになる。<sup>13)</sup>」彼の“to abuse hospitality”という言葉に見えてくるのは、「我々の幸福なる社会」と、「彼等の幸福なる社会」の基準は違って当然という、彼には何の疑いもないのであろう大前提である。しかし、我々も、彼等も、普遍的な人間的な感情を持っているゆえ、「幸福なる社会」の本質自体は違うわけではないのだ。そして、そのことは、「幸福なる社会」の側にいる人々にはいつも忘れられがちなのだ。

11) 「タイ当局が近く、ミャンマー(ビルマ)から逃れて同国の滞在している少数民族の難民のうち、78人を送還することが明らかになった。・・・国際人権団体などからは、送還後にミャンマーで虐待を受ける恐れがあるとの声があがっている。」(「タイ当局、ミャンマー難民78人を送還へ 人権団体が懸念」CNN.co.jp, Yahoo ニュース, 2009年2月27日)

12) *In This World*

13) CNN News on line, Politics Section, February 2, 2009.



#### 4. 「幸福なる社会の衝突」と「国際社会」

同じく、オバマ大統領の就任式の前に大きなニュースとして世界に報道され続けたことに、まるで、その式に合わせたかのように撤退が終了したイスラエルのガザ攻撃がある。12月下旬に突然始まった空爆と1000人を超える死亡者、その中に多くの子どもも含まれていることで、イスラエルに対しての国際社会の批判は存在した。しかし、武力闘争を正当化しているハマスに対する自衛であるとして、イスラエルが譲歩することはなく、白リン弾という、極めて殺傷能力の強い爆弾さえ使用されたのである。そもそもガザへの攻撃が国際社会の批判を浴びたのは、これが最初ではない。丁度、8年にわたる大統領職をその式日に去った元ブッシュ大統領の唱える「テロとの戦い」の最中にも、ガザへの「誤爆」が国際的非難を浴びたことがある。そのガザの「誤爆」と、アフガニスタンでの400名を超えるとされる「誤って出た犠牲」の認識の違いに関する、以下のような報道があった。

今回のガザ空爆は「強引で、平和に寄与しない」というブッシュ大統領の批判声明は、同報道官が会見の中で発表した。これに対して、さっそく飛んだ質問は「イスラエルは『米国と同じようにテロと戦争しており、戦争では罪のない人々も死ぬ』と主張している。アフガン攻撃との違いは？」だった。報道官は、(1) 戦時に「罪なき死」が発生することは世界的に容認されている (2) アフガンで米軍は「罪なき死」を最少化するよう務めてきた (3) しかしガザ空爆は、内部に民間人がいることが分かっている建物への計画的な攻撃だった——という論理を展開した。「米軍の誤爆（過失）は許されるがイスラエル軍の故意によるガザ空爆は行き過ぎ」という結論になる。<sup>14)</sup>

また、アメリカの軍事行動に合わせて勢いを増したかのように自爆テロへの激しい報復行動が始まっていたイスラエル側も、ガザへの攻撃の正当性を主張した<sup>15)</sup>。そして、今回のガザ攻撃である。イスラエルの人々も、パレスチナの人々も、「幸福なる社会」に生きることを目指している。ただ、それが同じ地で築かれようとする時、どちらにとっても「幸福なる社会」が得られないでいる。長い月日、何の進展も見られないまま、両方に犠牲者が出る。いつものことながら、弱い側には、死者は日常となる。かつて、9.11後に自分に都合のいいやり方でアメリカが世界を2項に分け、単純化して、「文明」対「野蛮」、「正義」対「テロ」の戦いとしたことで、この単純化した世界観に付随して起こるはずであろうことに、サイドが、アメリカは「パレスチナの抵抗の本質が何であるかを理解した様子はまったくない<sup>16)</sup>」と抗議を表明したことがある。さらに、「テロリズム＝反米主義」といった等式がまかりとおれば、9.11のテロと、パレスチナ人がイスラエルと戦うためにしていることが区別できなくなるとサイドは憂慮を示した<sup>17)</sup>。なぜなら、前者は、「実行するだけが目的の、残忍な破壊行為<sup>18)</sup>」であり、後者は、違う行為だからである。

ガザのひどい惨状（イスラエルに大きな責任があります）の中で暮す若い男が、ダイナマイトを体に縛りつけてイスラエル人の群集に突っ込んでいったとしましょう。ほくは一度もそういうことに容赦を与

14) 毎日新聞 2002年7月24日。

15) 毎日新聞 2002年7月24日。

16) サイド、E. W. 中野真紀子・早尾貴紀（訳）『戦争とプロパガンダ』みすず書房、2002、p.70。

17) サイド、p.94。

18) サイド、pp.88-89。

えたり賛同したりしたことはありませんが、少なくとも理解することはできます——自分の生活や身の回りのすべてから締め出されたと感じている人間、自分の仲間たち、他のパレスチナ人や、両親や、兄弟姉妹が苦しめられ、傷つけられ、殺されたりするのを見てきた人間の、すてばちな望みなのです。彼は何かをして反撃したいのです。<sup>19)</sup>

パレスチナの若者を「自爆テロ」に向かわせるものは、彼等の幸福なる社会の実現を不当に止められているという「不正」の感覚であり、インティファダに失敗し、激しい迫害のもとで、彼らが持っている不正の感覚を伝える手段を彼ら自身がすでに持たないためなのである。そして、イスラエルが、自国の死者の感じたであろう不正のみに共同体として応答して、即座に軍事力行使する時、その軍事行動で増え続ける死者の属する共同体の者達の間の側には、さらに強い「不正」の感覚がおこり、追い詰められた者の絶望的な反撃となっていく。同時に、その「幸福なる社会の衝突」という問題を半世紀にわたって知りながら、解決に貢献できないままに「国際社会」の問題も存在するのである。

##### 5. 「我々の幸福なる社会」と「彼等の幸福なる社会」を「繋ぐもの」

かつてアフガニスタンへの空爆時に最も明白だったのは、グローバリゼーションは、南北格差を拡大させているということだった。資本制の帰結であるグローバリゼーションゆえ、経済的に価値を生み出さないと見なされて取り残されたアフガニスタンのような貧困の地域が世界に多く存在する。グローバリゼーションの空白地帯であるような、そんな地に、米国の最先端のミサイルが次々に落ちていく。ミサイルの目的は、アフガニスタンという国の壊滅ではなく、そこを支配するタリバンとテロ組織の壊滅にあっても、世界でも最も貧困の地域に、世界の一番富裕な国の軍事力が行使される事実にかわりなく、力こそまさに善であると言わんばかりの映像であった。そこに存在する力の傲慢——9.11のテロの犠牲者に流した涙や怒りが、こうした映像からでも想像できるはずの他国の人々の死には同じように向かないという事実、は明らかだった。強大な軍事力によって反撃に出ることが出来る国の国民と、多くの人々が難民となり餓死の危険もある場所の国民とでは、一人の命の重さが違うとでも言うように、誤爆に謝罪することすらなしに軍事行動が展開されているという事実は、同じ頃繰り返し流された人道援助の食糧投下の映像によっても、打ち消せない事実なのである。実際、米国の良心を誇示するかのようになり繰り返された人道援助の食糧投下の場面の背後では、爆撃によって、難民援助の食糧配給が滞り、さらには、米国がパキスタン側に、「アフガニスタンの民間人に食糧その他の物資の多くを供給する、トラック輸送部隊の排除を要求」したということもあったという<sup>20)</sup>。取り残されていく側のグローバリゼーションに対する反感は大きい。同時多発テロ後、例えば、タイでは、反グローバリゼーションの立場からのアメリカ批判、例えば、「自由貿易、自由経済が欲望をもたらしている」といった論調の記事が見られた<sup>21)</sup>。広がる世界の格差の中で「幸福なる社会」の実現を妨げられているという「不正」の感覚をもつ人々がより多くいる南側の人々が、9.11のテロに対して、北側の人々とは異なる反応をした理由は、「我々」は恵まれた側にいる、「我々の幸福なる社会」は存在して

19) サイド、p.95.

20) チョムスキー、N. 塚田幸三『「ならず者国家」と新たな戦争』荒竹書店、2002.

21) 重富真一（他）『アジアは同時テロ・戦争をどう見たか』明石書房、2002、p.59.

いると満足している者達には理解できないのかもしれない。それでは一体、2つの「幸福なる世界」を繋ぐものはあるのだろうか。

かつてパレスチナ取材した広河が、「私たちが『安全』を考えなかったとき、誰かが私たちの体から石けんをつくったのだ」というイスラエル人のコメントを紹介している<sup>22)</sup>。広河は、これが、ナチスのジェノサイドを経験したために、安全のためには許されることがあるという、イスラエルの人々が少なからず示す発想と結びついていく危険を指摘し、さらに、広島原子爆弾の経験と比較している<sup>23)</sup>。もし、人間に対して使われた核爆弾、としてではなく、日本人に対して使われた核爆弾として、核に反対する姿勢を持つのであれば、いつか、日本が核爆弾を他国民に使用することには抵抗がなくなるかもしれないという恐れである<sup>24)</sup>。ユダヤ人に対するジェノサイドも、広島に落とされた原子爆弾も、そして米国の同時多発テロも、人類にされるべきものでないことがされた、という点で、「我々」も「彼等」も同じ恐怖と怒りを共有し、そこから、将来にわたって同じような不正の痛みを避ける、そして与えない努力が始まらなければならないのである。自爆テロ自体には強く反対したサイドが主張し続けたのも、絶えず「正義」を掲げる必要である<sup>25)</sup>。「正義を掲げてこそ、パレスチナ人は高い道徳的な位置を獲得・維持することができる」と<sup>26)</sup>。ここでの「正義」とは、普遍的な定義のできる正義そのものや特定の状況を意味しているのではない。幸福なる社会への実現、正義の実現の可能性を求めるパレスチナの思いが他者に理解されうるような、「我々」にとっても「彼等」にとっても最重要であるという意味での「正義」なのである<sup>27)</sup>。

こう考えていくと、正義は、「幸福な社会」を繋ぐ一番のモノとして浮かびあがる。唯一の正義が実現された状態そのものを記述することはできないが、幸福なる社会の実現を妨げる不正がおこなわれていると感じる人々を少なくしていくということに向けての努力を生み出すことができる。「我々」に感じられた不正は、「彼等」に向けられた不正と同じ痛みを引き起こしていることを理解できる力を養う努力は必要であり、また教育で教えていく努力は可能なのだ。そして「我々」の正義と幸福の実現のために、「彼等」が不正だという強い感覚を持つのであるのなら、その不正であるという感覚からくる苦痛を許しているような「我々の幸福なる社会」なるものは、「彼等の幸福なる社会」だけでなく、「我々の幸福なる社会」も保障しないという認識を、教育が地道に教えることは出来るのである。ロールズが言うように「ある人々の自由 (freedom) の喪失が、他の人々に今まで以上の善を分け与えることを理由に、正しいとされることを、正義は認めない。少数に強いられる犠牲が、多数に享受される以前より多くの有利性 (advantage) の合計によって償いをうけるということを、正義は許さない」<sup>28)</sup> という正義の本来の役割に基づいて

22) 広河隆一『パレスチナ新版』岩波書店、2002、p.15.

23) 広河、p.16.

24) 広河、p.16.

25) サイド、p.52.

26) サイド、p.52.

27) サイドは、これを記した時点で、こうした正義についての理解がなされていないという点で、故アラファットには失望していた。「アラファットが一度も理解したことがないと思われるのは、わたしたちは、これまでも現在も、正義と解放の原則を代表し、象徴し、その体現として支持されている一つの運動なのだということだ。このことだけが、イスラエルの占有からみずからを解放することをわたしたちに可能にさせる。」(『戦争とプロパガンダ』p.72)

28) ロールズ、J. 矢島欽次(他)訳『正義論』紀伊国屋書店、1979、p.3.

である。

2009年1月20日、世界の人々が高い関心を持ってむかえたオバマ大統領の就任演説の中には、世界に向けての「彼等の幸福なる社会の実現」に対する「我々の幸福なる社会の責任」という考えも含まれていたと考えられる。

To the people of poor nations, we pledge to work alongside you to make your farms flourish and let clean waters flow, to nourish starved bodies and feed hungry minds. And to those nations like ours that enjoy relative plenty, we say we can no longer afford indifference to suffering outside our borders, nor can we consume the world's resource without regard to effect. For the world has changed, and we must change with it.<sup>29)</sup> (貧しい国の人々には、農場には豊かに作物が実り、きれいな水が流れるようにし、飢えた体と乾いた心をいやすために、私達は、あなた方とともに働くことを約束する。そして、米国と同様に比較的豊かな国には、もう他国の苦難に無関心でいることは許されないし、影響を考えもせずに世界の資源を消費することもできないのだ、と言う。世界は変わったのだから、私達も変わらなければならない。)

また、安全という目的のために二者択一で正義の概念を犠牲にすることも拒絶された。

As for our common defense, we reject as false the choice between our safety and our ideals. Our Founding Fathers...Our Founding Fathers, faced with perils we can scarcely imagine, drafted a charter to assure the rule of law and the rights of man, a charter expanded by the blood of generations. Those ideals still light the world, and we not give them up for expediencies.<sup>30)</sup> (国防については、安全か理想かの二者択一を拒絶する。米国の建国の父たちは、私たちが想像できないような危険に直面して、法の支配と人権を保障する憲法を起草した。そして、何世代もの血を流す犠牲によって広まった。この理想は今も世界を照らしているし、私たちは都合のために、それを捨て去ることはない。)

政権発足後すぐに、1年以内のキューバ・グァンタナモ収容所の閉鎖が発表された。9.11同時多発テロ以後、国際法を無視したまま拷問が行われているという批判を受けても、全く変更がなかった「テロとの戦い」の二者択一の論理という方向性は、ついここで変更されたのである。まさに、シュクラーが言うような、それぞれの不正と感じている者の感覚を訴える声に他者が応えることは、「正義」の実現への誠実な方法となる。自分が不正をされていることを表出する、その声がいかに小さかろうと、耳をすまし聴き取ろうとする努力が絶えずされるならば、そして、その努力が出来る人間でさえあれば、他者への応答の可能性が生まれるのである。その人たちが、その場において、よく生きることをさまたげられ、不正義にさらされたと感じる、その他者の声のまま聴き取ることから始められる点で、「正義」の応答なのである。この収容所での取り扱いを不正義と感じている「彼等」について応答したことで、米国の正義の応答が始まったようにも見えた。

さらに、貧しい世界は愚かではないと、少なくとも、就任演説では理解が示されたのだと考え

29) 「オバマ大統領就任演説全文 Text of Obama's inaugural address」読売新聞、2009年1月22日（訳は筆者自身による。）

30) 「オバマ大統領就任演説全文 Text of Obama's inaugural address」読売新聞、2009年1月22日（訳は筆者自身による。）

るべきだろう。しかし、それでも、就任したオバマ大統領は、直後に、間髪をおかず、イスラエルの側の自衛手段としての立場や、ガザ攻撃の理由自体は、米国は理解することを明瞭に示した。理想を掲げたオバマ政権も、世界の「幸福なる社会」の衝突に対応では、すでに矛盾を示しているのである。『雪』の作家パムクが、丁度、その就任式の前に、日本の新聞に寄稿した論説の中に、ガザへの攻撃にふれた、このような箇所がある。

故サミュエル・ハンチントン米ハーバード大教授は、著書「文明の衝突」の中で冷戦後の世界を諸文明間の対立として描いた。だが、私はこの考え方が世界に広がるのに賛成できない。非イスラム教徒によるイスラム教徒殺害を正当化する道具にされかねないからだ。自分たちを困らせるイスラム教徒を殺した後で、これは文明の衝突なのだ、と言い訳されてはたまらない。イスラエルによるパレスチナ自治区ガザへの攻撃は、それだけで恥ずべき行為だ。「文明の衝突」などというものではない。<sup>31)</sup>

さらに、『雪』を書いたことにおける彼の作家としての信念にも触れて、

作家には、声なき人の声を代弁する義務もある。トルコは階層分化の激しい社会で、貧しい人たちの声は、為政者など上流階級に届くことはなかった。小説『雪』で、私は、世俗主義とイスラム運動との対立に巻き込まれる主人公の目を通し、辺境の町の貧しい人々の悲しみをくみ取ろうとしたつもりだ。作家の仕事というものは、文明を比較することではなく、そこに生きる人を見つめることだと思っている。<sup>32)</sup>

こうした考えは、彼もまたイスラム教徒であるトルコの作家だから示されたのではない。ガザ侵攻の余波が続く2月に、日本人作家、村上春樹が、イスラエル・エルサレム賞を受賞し、エルサレムの授賞式で、ガザ侵攻での、「1000人以上が死亡し、その多くは非武装の子供やお年寄りだった」と言及、「私は沈黙するのではなく（現地に来て）は話すことを選んだ」と自分の考えを述べた<sup>33)</sup>、まさにそれと同じ理由なのである。

本来人々を守るべきシステムが、「時には、勝手に命を奪い、私達を殺し始め、冷酷に、私達に他者を殺させ始める、効率的に組織的に。」小説を書くことにおいて、彼はいつも心に、高く堅固な壁と、それにあたって壊れやすい卵を描いていると言った。「私は、いつも、卵の側です。」と彼は言った。「私達はみな組織と呼ばれる壁に対しては壊れやすい卵です。・・・見れば、希望はないように見えるでしょう。・・・壁は高すぎ、強すぎる。・・・もし、私達に、何か勝利の希望があるとしたら、それは私達の固有のユニークささから来なければいけません。」と彼は語った。「私達一人一人は、壊れやすい命を持っています。システムはもっていません。私達は、システムが私達を搾取するのを許してはいけません。」と彼は付け加えた。<sup>34)</sup>

2001年9月22日、9月11日の同時テロ直後、「彼等一敵」と「我々一味方」の二者択一の風潮一辺倒で、「我々の愛国心」こそが全てを解決するような発言のみが続いていた米国での、テオドル・アドルノ賞受賞後のデリダの勇気ある発言が思い出される。

31) 「多文化の共存 O・パムク」, 読売新聞, 2009年1月9日。

32) 「多文化の共存 O・パムク」, 読売新聞, 2009年1月9日。

33) 「村上春樹さん、ガザ過剰攻撃に苦言、エルサレム賞授賞式で」毎日新聞, 2009年2月16日。

34) "Write Murakami wins Israeli prize" *The Daily Yomiuri*, February 17, 2009, 訳は筆者による。

「9月11日の犠牲者の方々に、無条件の同情をささげます。しかしそれでもわたしは声を大きくして語りたい。この犯罪に関して、政治的に無実な人はだれもいないはずです」という趣旨のことを語っている。みずから他者との関係において考えるこの自己関係こそが、唯一の真の正義なのである。<sup>35)</sup>

世界で正義がなされない時、「政治的に無実な人は誰もいない」のであり、「他者との関係において考えるこの自己関係こそが、唯一の正義」であるがゆえに、バムクも村上も、デリダも、沈黙ではなく、発言の方を選択したのだ。『雪』の中でもまた、自分の幸福を求める主人公Kaが、西洋の視座から確立される「正義」や「幸福」、そして何よりも自分は政治から逃れて幸福に生きる権利があるという妄想について、Blueから皮肉られる箇所がある。

“And now you’ve aired all your smug Western views, probably even having a few laughs deep down inside at our expense. I don’t mind, and neither does Kadife, but by inflicting your own naïve ideas on us, by rhapsodizing about the Western pursuit of happiness and justice, you’ve clouded our thinking. I’m not angry at you, because, like all good people, you are not aware of the evil inside you. But having heard it from me, you can’t claim to be an innocent from now on.” (p.256) (もし、君がそのしょうもない西洋の考えを振り回し、おそらく我々のことを内心笑っているとしても、私は構わないし、カディフィも構わないね。でも、我々についての自分のナイーブな考えを押し付けて、西洋の幸福と正義について妄想することで、我々の考えを混沌とさせているんだ。君に怒っているんじゃない、他の多くの善良なる人々と同じで、君も自分の中の悪に気づいていないんだから。だけど、今こうして私から聞いた以上、君はもう自分が無垢であることを主張はできない。)

「西洋の幸福と正義について妄想する」ことで、勝手なことを言うことはできるだろう、しかし、聞いてそうするのであれば、「自分は無垢であることを主張できない」——すなわち、自分自身が生きることが出来る幸福なる社会を求める一方で、世界の葛藤には目をつむり、自分だけは「政治的に無実」、「無垢である」と主張できる者は誰もいないのだ。

## お わ り に

異なる人々の国家や異なる民族の住む地域からなる世界で、それぞれの「幸福なる社会のための選択」ということに限っても互いに対立してしまうような選択肢があり、自分とは異なる者達の幸福の実現を犠牲にしているという事実が存在する。そうした文化の異なる人々の国家とそこに住む人々の幸福との関わりを異文化コミュニケーション教育ではどう考えていくべきなのかについて考えて、まず行き着いたのは、「どの場所でも正義となるような正義」に絶えず戻るような地道な思考である。そこでは、私達の誰もが、「彼等の幸福なる社会」を「我々の幸福なる社会」と同じ基準で考えていく努力を等しく要求されている。「幸福なる社会のために覚悟を持つ」ことは、そうした普遍的な正義を求めて、まず自分自身、つまり「我々」自身が、「私」自身が関わりを持つという覚悟のもとに選択を続けることになる。異文化コミュニケーション教育は、そこまでに学生を導いていくべきだろう。世界で、「移民」「難民」という立場で「幸福なる社会」を生きることの決断・重荷、幸福なる社会側の、あるいはそうでない側の「愚かさ」を見

35) ジジエク、スラヴォイ「現実の沙漠によくこそ」中山元(編)『発言 米同時多発テロと23人の思想家たち』2002, p.230.

る視線，幸福なる社会の実現が真っ向から対立する場，それらに気づき，「我々の幸福なる社会」と「彼等の幸福なる社会」を繋ぐものとしての普遍的な正義を，我々の社会のみならず，彼等の社会も一緒にして考えていく姿勢を養い，そして，最終的には，自身の選択をも示す必要があることを理解するまでである。これを容易だと言うことはできない。例えば，2009年3月のある日（実際そうだったように）日本からの退去を命じられ，日本語しかすでに理解できない子どもを抱え，一家離散とならないために闘っているフィリピン家族と，スダーンのダルフルからのオランダNGO退去命令で数百万人の難民に影響が出るという2つの「彼等」のニュースに気づき，「我々の幸福なる社会」との関わりで考え，自らの行動について選択することができる能力まで理解しなければならないのだから。しかし，少なくとも，容易かどうかだけが教育目標の選択基準になるべきではないことは確かなのである。ただ，達成可能というレベルでは，「彼等」と「我々」の境界のない「正義」の基準を使うことに，世界の多くの場で失敗し続けている事実と，その過程を妨げる形で頻繁に使用される「我々の愛国心」の存在を，どのように考えていくべきなのかについて，考察を続けていかなければならないであろう。

〔2009. 9. 28 受理〕